

一八八三年十二月二十三日(日)

ドツキネーショル
南神寺院における愛すべき師、グル聖ラーマクリシュナとその信者たち

三昧境にて——見神とタクールのバラムハンサ大覚者の境地

タクール、聖ラーマクリシュナは自室の南東側ベランダで、ラカール、ラトウ、モニ、ハリシユ等信者たちと共に坐っていらつしやる。時間は午前九時ころ。日曜日、オグロハヨン黒分九日目、一八八三年十二月二十三日。

モニが師のもとに滞在して十日目である。

マノモハン氏がコンナガルから朝早く来ていた。タクールにお会いして、少し休憩してからカルカタに行く予定である。ハズラーもタクールのそばに坐っている。ニーラカンタの故郷から来た一人のヴィシユヌ派の信者が、タクールに歌をうたつてお聴かせしていた。この人は初めに、ニーラカンタの歌をうたつた。

聖ガウランガーまるでクリシュナのような踊る神の恋人の、顔の色は^{こがね}黄金色

この度は昔の容姿を隠し、ナディアアの地に違ふ身体で現れた

末世の深き闇を打ち破り、きらめく光の中で熱愛の喜びを教えるためにやって来た

三つの熱望とその味わいのためにやって来た

そう、そのために降りて来たのだ

世界は三つの熱望とその味わい、特に熱愛の喜びに触れ、甘露に酔いしれる

あなたはラーダーの黄金色と、クリシュナの青色を差し替えてやって来た

あなたは大恍惚に駆け上がり、純性と恍惚はあなたの中に溶け込んでしまう

その大恍惚に酔いしれて、あなたが森の中を声を張り上げ歩き回れば
大いなる熱愛の潮流があなたの周りに溢れ出す

聖地を旅する新しき遊行者なるあなた

さあ、ニラチャル（フリー）に行き、そしてカーシー（ベナレス）に行け

カーストの区別なく、神の愛をふんだんに分け与える御方よ

次の歌は、心のなかの祈りに関するものだった。

聖ラーマクリシュナはハズラーに向かっておっしゃる――

「この歌（心の祈り）は、どうもあんまり感心しないな」

ハズラー「これは修行者や聖者を対象にした歌ではありませんからね。――智慧のランプだとか、

智慧のお像すがただとか！

〔五聖樹パンチャバタイの杜でトーター・プリーが泣いたこと——パドマローチャンも泣いたこと〕

聖ラーマクリシュナ「この歌は、どうしたものかねえ！ むかしはどの歌も正しい精神きもちを表わしていた。五聖樹パンチャバタイの杜のところではナンゲタ（トーター・プリー）にわたしが歌つてきかせてやったよ。生きとし生けるものよ、武器を取りて戦え！ 死はヨロイに身をかためて汝の家に攻めきたるゝと、も一つ、大実母おおみはよ、誰をもとがめず、自ら掘りし井戸の水に、われは溺れて死ぬばかり」と。

ナンゲタは智者のなかの智者で、こんな歌の心きもちはわからなかつたろうに、それでも聞いて泣いていたよ。こういう歌には、まぎれもない事実が歌い込んであるんだから——。

めでたくも雄々しき愛しの君を想えば、死の王ヤマ近づくとも何の怖れあらん。おお、わがハリよ！

パドマローチャンも、わたしがうたうラームプラサードの歌をきいて泣きだしたつけ。——ねえ、あの偉大な学者パンディットがさ！

〔見神ヴィシシュクタ・アドヴァイタ——一と多、単一と多様——タクール、聖ラーマクリシュナと制限不二論〕

食後、タクールは少し横になってお休みになった。モニは床の上に坐っている。音楽塔から聞こえてくる楽器の合奏を、タクールはたいそうよこんで聞いていらつしやる。聞き終わるとモニに、生

き物と世界になつていらつしやるのはブラフマンそのものだ、ということの説明して下さった。

聖ラーマクリシュナ「(モニに)誰だったか忘れたが、ある人が、『その土地ではハリの名を称名することはありません』とこう言った。言い終わつたとたんに、あらゆる生き物になつていなさるのはあの御方以外にない、ということが見えたよ。(原典註1)無限の水の——泡のようなものか——きらめきだよ！ それから、数かぎりもない雨のしずくのようにも見えた！

郷里(くに)からポルドワンに行く途中、草原に向かつて一気にかげだしたことがある。そこで生きものたちがどんなふうにして食べたり暮らしたりしているか見ようと思つてね！ 行つてみたら、その原っぱにアリンコが這(は)つていた！ あらゆる場所は意識でいっぱいなんだよ！」

ハズラーが部屋に入つてきて床に坐つた。

聖ラーマクリシュナ「いろんな花——花びらが重なりあつた花(原典註2)のようにも見えるよ！ 小つちやな形や、大きな形の！」

こうした神聖神秘な話をなさつているうちに、タクールは三昧に入られた。「わたしは成つている！ わたしは来ている！」とおつしやつて——。

(原典註1) 真(まこと)のヨーギーは万物のなかに自己(アトマン)を見 また自己のなかに万物を見る

まことに真理を覺(さと)つた人は あらゆるところを同等に見る —— ギーター 6・29 ——
(原典註2) すべては靈存在(サキヤニヤ)であると実感している —— ヴェーダーンタ・スートラ 28・1・2 ——

この言葉を口にされてから、完全な三昧状態になられた。不動の姿！長い間そのままでおられた後、やがて、外部意識がやや戻ってきた。

こんどは子供のように笑っていらつしやる。笑いながら部屋の中をそぞろ歩いておられる。

〔悲しみと欲がなくなれば大覚者パラマハンサの境涯——修行中、バナヤン樹のところで大覚者パラマハンサを見た話〕
 靈妙不可思議なものを見たあと、それが歓喜の光となつて両眼から輝き出ているようなタクールのまなざしであつた。お顔は笑い、視線は虚ろうつろであつた。

タクールは一步、一步と歩きながらお話になる——

「バナヤン樹のところで、大覚者パラマハンサを見たことがある。——こんなふうに笑いながら歩いていたつけ！わたしはあれと同じになつたのかな！」

このようにして歩きまわられた後、タクールは小寝台のところに行つてお坐りになり、宇宙の大実母マを相手に話をしていらつしやる。

タクールはこんなことを言つておられる——「いいよ、わたしは知りたいとも思わないよ！——マ、あなたの蓮の足に清い信仰を持てますように——」

(モニに向かつて)「悲しみと欲がなくなれば、それが大覚者パラマハンサの境涯だよ！」

再び大実母マに向かつて——「マー！——フジヤ 禮拜まで取り去つてしまつて——でも、欲をすっかり無くしてしまふことはやめておくれ！——パラマハンサ マー、大覚者パラマハンサというもんは子供だよ——子供には母さんイが要るだ

ろう？ だから、あんたが母さん、わたしが子供。母さんがいないで、母さんのところから離れて、どうやって子供が生きていかれるんだい！」

タクルルは岩まで溶けてしまいそうな声色で、大実母と語りつづけていらつしやる。——「マー！ 一元論だけの智識！ あんなもの何だ！ 私があるかぎり、アンタもある！ 大覚者は子供だ。子供には母さんが要るだろう？」

モニは驚いて、口もきけずにタクルルのこの世にも稀有な状態を見ていた。そして、心のなかで思っていた。——タクルルはかぎりない恵みの海なのだ。私に信を与え、意識を目覚めさせるために、そして人びとを導くために、導師として、タクルル、聖ラーマクリシュナとして、大覚者の状態で顕れているのだ。

モニはなおも思いつづけていた。タクルルは、アドヴァイタ——チャイタニヤ——ニテイヤーナ
ンダと言われた。つまり、不二一元の智識が生ずれば靈意識に目覚める。そうすれば永遠の幸福が
得られる、ということだ。タクルルの場合は、ただ不二一元の智識だけではない——永遠の幸福状
態なのだ。宇宙大実母の愛のよるこびに常に浸りきって酔っておられるのだ！

ハズラーがタクルルのこの有り様を見て、急に手を合わせて時々つぶやいていた——「ありがた
い！ ありがたい！」

聖ラーマクリシュナはハズラーにおつしやる——「お前は信じているのかい？ でもお前がここに
いるのは、ジャテイラとクテイラみたいに芝居の味つけのためかい？」（訳註、ジャテイラとクテイラ——

1883年12月23日(日)

二人とも騒動を起こすゴ牛飼ビ乙女!

夕方になった。モニは一人で境内のあたりを散歩している。タクール、聖ラーマクリシュナが先刻見せられた不思議な境地について、想い巡らしていた。それからタクールが、「悲しみと欲がなくなったのがこの境地だ」と言われたことについて考えていた。師グルとしてのタクール、聖ラーマクリシュナは、いったい何者なのだろう？ 天にまします至聖の神が、われらのために肉体をまどつて地上に來られたのか？ タクールはおっしゃった——「神イシの分身ユフラ・コデーか神アツァターラの化身アツァターラでなければ、ジャダ三昧サマディ（無分別三昧）から下りてこちらに戻ってこられない」と。